
一部50円です

凍てつく社

昨夜の吹雪が木々にエビのシッポを付けて霧氷をつくり石灯籠のクモ巢も雪をまとして東の間のデコレーションを演じている。数十年ぶりという大雪で参道の石段が隠され両側の木立がつづく道は神々しい。社の山門だけがわずかに人の気配を感じさせる。

愛宕山は昔から火の守り神として親しまれ、近在の村々では毎年のように世話役がお参りして「阿多古祀符 火迺要慎」の御札を持ち帰り、それぞれの家の台所に張り付ける風習がある。

私は、一昨年まで愛宕山に登ったことがなかった。興味を感じなかったからである。ところが、病気になってはじめて歩くことの大切さを悟り、友人が正月に登ると聞き同行したくなった。これまで登山の魅力に欠けると思っていた愛宕山が、体力の衰えた私にとっては格好の山だと考えたからだ。はたして登

れるのか？退院して一年と二ヶ月、おぼつかない足取りではあるが、友人たちを頼りにして登ることにした。幸いにも初めての愛宕山は雪も少なく友人たちの助けもあって何とか登ることが出来た。

今年は日々歩く事を心がけてきたから昨年よりは楽に登れるはずと意気込んで保津峡駅に降りた。雪化粧した尾根筋をみて少し不安がよぎったが、積もった雪を踏みしめながら歩き始めると学生時代の冬山の興奮がよみがえってきた。もう二度と山行など出来ぬと思い装備を処分し思い出の世界に閉じ込めたはずの冬山がよみがえって来たのである。

なえかけた心が山の霊気を吸いこんで息を吹き返すように、踏み跡のない雪の斜面を駆けだすと眠っていた野生が湧き出てきた。この一年間ハビリに励んできた私に山の神が特別な計らいをしてくれたのではないかとさえ思えた。来年はどんな天気で迎えてくれるだろうか。今年一年の精進によっては無風快晴にも吹雪にもなるのではないかと想像しだすと、来年も是非とも登ってみたいとなった。

死をめぐるあれやこれ 7

石川 吾郎

人はよく生きることは可能か
 今年の正月、私には二つの収穫があった。一つは一月二日に大雪の愛宕登山をして、生涯初めて冬山の素晴らしさを体験したこと。そしてもう一つは小さな発見をしたことだ。これについて説明をこころみる。◆私は「心」についてのある仮説を作っているのだがそれはあんまり抽象的なので説明するのがなかなか困難だった。最近その仮説から「人はよく生きることはできない」という一つの帰結を導くことができることに気づいてしまった。◆人は通常の状態にあるとき、ある限定した領域の範囲で「よいこと」「最善」ないし「よりよいこと」を求める存在だと考える。これは「主観」であってもよい（むしろそれしかない。それぞれの人が違った価値基準を持つのはいうまでもない）。だがいくら主観であっても、比較ができる構造が必要だ。善悪・良し悪し・より良い、などはまさに比較をしている。この比較の仕方はさまざまあるが、比較するには何らかの形の「基準」が必要になる。科学技術では比較を数値化して効率的に探求する。個人の感情のレベルでも、病的であったり激情で思考過程が障害される場合を除けば、この比較の過程は働いている。

たとえば金をもうけるにはどうすればよいか、また彼女にもてるにはどういう方法をとるか等々、日々の生活の中で我々はこのように比較を行っている。(二ページにつづく)

芥川だより 97号

目次 ページ

「人生全体」といったように範囲が無限定な場合、つまり「全体」が対象になる場合には、その全体に一貫した「基準」は存在できず、この比較の過程そのものが成立しなくなる。人の人生全体は特定の一つの基準をもとにして善し悪しを判定することのできない構造をもっているというのが私の小さな発見なのだ。◆比較可能なのは「全体」ではなく「部分」だけに限られる。したがって「よく生きる」といった人生全体に関わる事かららについては比較は成立せず、結果「人はよく生きることは不可能だ」という結論が導かれる。◆これ以上を問われれば、私の理論を全面展開する必要が生じてくるが、それには恐らく厚めの本を一冊書く必要が出てくる。この本を書くことを私は従来の宿題としていたのだが・・・。



巻頭エッセイ

下村嘉明

1

巻頭コラム

石川吾郎

1

闘病記 23

梵店主

2

おっちゃんこチヨイぼけ 22

A O

3

世界一周旅行記 9

若山哲郎

4

大人の今昔物語 7

石川吾郎

5

素老人・よもだ帳 11

坂本一光

8

哲学屋のつぶやき 8

祖蔵哲

9

花盗人のうらおもて 1

大江雉鬼

11

B級サラリーマン渡世譚 21

明石幸次郎

12

埋め草

C

13

女90年の軌跡

眞糺

14

俳句

土田裕

14

編集後記

下村嘉明

14

闘病記 23

梵店主

迷走の世界

「ケケ、ケー」とすつとんきような声で看護師を笑わせる面白いおじさんが、芦屋の爺さんが入院してから間もなく、よっちゃんの斜め向かいのベッドにやってきた。

とにかくしゃべくりが上手くて吉本の芸人かと思わせた。そのうえ声がなんと

も言えない、笑いたくなるような声を出すのである。

芦屋の爺様で変わってきた病室の雰囲気、漫才師も顔負けするようなおじさんが入院してきたことで笑い話がたえない演芸場のようなになった。

このおじさんは、自分のことを隠さず何でもしゃべる。生まれは淡路島のタマネギ農家の七人兄妹の五番目。高校出て神戸の乳業メーカーに就職して三十五年間働いた。

よっちゃんは、このおじさんの話を聞きながら、自分の歩んできた人生を思い返すのである。入院当初、担当医師に「ここは天国のようなところだ、出来るだけ長くおいてください」と言うと、医師は「変わった人やなあ。よほど大変な生き方をしてこられたんですね」と言った。

確かに、厳しい生き方をしてきたのかもしれない。山登りに例えれば、整備されたハイキングコースをわざと嫌い、当てのない雑木の中に道を探してきたようなものだから。登る山を見失ったり、崖から落ちそうになったりしながら、夢中になつてもがいてきたのだ。迷い続けて生きてきたのである。もう少しましな生き方があったのでは、と考えるがいい案は浮かんでこない。

山奥の百姓の次男坊であったために、街に出て行かなければならなかった。高校を出て安定した職場に就職し定年まで勤め上げればよかつたではないか。なに

も無理して大学までいく必要などなかったのでは。最初から無理を承知でやってきて更に無茶を重ねてきたのである。

そのようになった要因を探っていくと幼い時の遊び仲間にとどり着く。気弱でケンカが苦手、いじめを受けてもやり返すことが出来なかった。家に帰り母に、ゴンタされたと言うと、「勉強して見返したれ!」といつも言った。

それが勉強を始めた理由である。何とかしてケンカでは勝てない年上の者に学校の成績で勝つことによつて見返してやろうと考えたのである。いくら成績が良くなつてくると、先生からも目をかけられ生徒会の役員にもなりリーダー的な行いを自分に強いるようになった。

調子者なのか、エエカッコシなのか知らないが、一度まわりからおだて祭り上げられると降ろることが難しくなる。自分の力なさを知りつつも流されていくのである。このように変化した性格は、その後の生き方に大きく影響する。

自分の才能やまわりの環境が恵まれておれば更に飛躍できたかもしれないが、よっちゃんにはなかった。無いくせに飛躍の夢を見続けて生きてきたことが、そもその始まりだと思える。

母は、お前は一二〇%ぐらい無理して生きてきた、という。ほんとうに人より頑張つて生きてきたのだろうか。そう思っているだけなのではないだろうか?

まさかの出来事…の巻

被害妄想に取りつかれたK子、副甲状腺に異常が見つかって手術が決まり、その検査の段階で乳癌の可能性が発覚し、検査づけの日々を送る親友のF子。病気は本人と家族で対応するものという認識が一般的だが、私たちのように非婚で子なしの場合、親が既に亡くなっていたり、元気でいても高齢で頼れないということもあり、「友だち」の出番が増える。私も病気になったら、頼るのは八十八歳の母ではなく、近くににいる友だちだ。だから、というわけではないが、麻酔をかけてするという検査に付き添い、一週間後に出た結果も一緒に聞きに行った。つい二カ月前には考えもしなかったことに向き合う日々だ。

は被害妄想や病気どころではない、という事件を起こしかけた。思わせぶりはいけない。火事を出しかけたのだ。つくり話？と思う人は、うちのカーペットを見てほしい。焼け焦げが三つ。うち一つの上には空気清浄器を置いてごまかしているが、タバコの焼け焦げの軽く百倍の大きさだ。もつと確たる証拠の座椅子があったが、それは捨てた。

その日の夕方、友だちのMが来て、ご飯を食べることになっていたので、私は鍋ものの準備をしていた。土鍋の愛用者なので、いまどきの電磁調理器ではなく、電熱器を使っているのだが、そのコイル（熱を帯びる部分）についた汚れを取ろうと、電源を入れ、ぼろ布で拭きとろうとした。バカである。電熱器は最初ジワジワと熱を帯びるので、その弱い熱の段階で拭けば、すつと汚れが取れる、と思っただが、意外に頑固。ガシガシすっているうちに、そのぼろ布が燃え上がった。アチチツ、とぼろ布を電熱器に戻した瞬間、ぼうつと炎が立ち上がり、私は咄嗟にそばにあった新聞の束で消し止めようとバサリと電熱器の上に置いた。新聞は水分を含み、束だと燃えにくいはずだが、肝心要、電熱器の電源を止めていなかったから、新聞の束の横からブスブスと煙と小さな炎が出た。ぼろ布の炎を消せばいいと思っていたときは冷静だったが、この瞬間、「火事！」という言葉

が頭をよぎり、焦りまくった。スリッパと座椅子で燃え出した新聞を踏みつけて何とか消し止めたから、こうしてこの原稿を書いていられるのだが、もし、あのとき動転したまま、電熱器の電源を切ることに気が回らず、消火活動に励んでいたら、よくて私の部屋、全焼。悪くて、建物全体が燃え落ちて、病院もしくは警察に収監され、一生涯かかっても払いきれない賠償をしなければならなかった。その火事で、だれかが焼死したりしていたら、賠償なんてできるものではない。あああ！怖かった。

その後、どうしたのか？ 何も知らずにやって来たMと二人で普通に鍋を食べた。電熱器は不思議にも、ちゃんと電源が入った。こういうシンプルな家電は頑丈である。

Mは中学生のときに、家で火事を経験している。幸いボヤですんだらしいが、炎恐怖症というのだろうか、誕生日のケーキに立てるローソクも嫌いで、「願い事」もそこそこに「危ないから消す！」という勢いで吹き消してしまう。そんなMに、実はさつき火事が起きた、と話したのは食後だ。Mは言葉をなくし「あ」とき、お母さんは布団で火を消して、一旦、完全に消えていたのに、夜中にそのずぶねれの布団から火が出た」という話をした。その晩、私は何回もカーペットの焼け焦げと、燃えたというか溶けた

座椅子を何回も触って熱を帯びていないことを確かめた。まったく人生波乱万丈である。

うちに三つ付いている火災報知器はどれも鳴らなかつたし、Mはにおいに敏感だが、部屋に来たとき、「焦げ臭い」とも言わなかつた。私はどこもヤケド一つしていないし、ボヤというほどでもないボヤですんだのだが、危機一髪だったのは真実だ。

もし、あの火を消し止めることができなかつたら、どれだけ莫大な迷惑を周囲におかけしたかわからない。「人間、えらそーにしたらアカンな。ある瞬間に無一物（火事を出せば、それ以下だ）、ある瞬間に死体もしくは犯罪者（過失でも類焼すれば犯罪だろう）、もしくは火傷の症状によっては深刻な障害者になるんだ」と思い知った出来事だった。部屋に置いているいくばくかのお金、通帳などが燃えなくてよかった、とも正直、思ったけれど、そんなの被害の中で最も小さいものだろう。上の階にはまだ三歳ぐらいの女の子も住んでいるし。あの子に、もしものことがあつたら、死んでお詫びしても足りなかつた。それを思えば、病気も被害妄想もそんなに大したことではないのかもしれない。少なくともよその家の幼子を道連れにしたりはしない。本当によかった！（A O）



情熱の国ブラジルの不満

さてお正月を過ぎててもまだ船は大西洋上です。クリスマスから新年にかけて船内ではいろいろな行事がありました。クリスマスにはちよつとしたディナーがでて、パーティーがありました。お待ちかね、ダンスパーティーです。前回に書きましたが、ダンシングおぼさまにとっては晴れ舞台。普段は共有スペースとして使っている場所が急遽ダンスホールになり皆に披露します。愛しのパートナーと嬉しそうに踊っている姿をみると思わず応援したくなります。そんなひたすらなおぼさま方です。そして大晦日にはカウントダウン、元旦には餅つき大会など日本にいる時よりも新年の気分が味わえました。しかしここでまた年寄りの小言。

この船は世界一周という大看板を掲げているのかかわらず相変わらず自国の文化には関心が薄いのです。例の船内新聞の正月の記事で本来「鏡開き」とするところを堂々と「鏡割り」と書いていました。読者はわずか千人余りのミニ新聞とは言え、自国の文化の正しい認識を表現が出来ない人が外国に来て大丈夫なのでしょうか。

さて、一月といえば北半球では冬、まして日本海などでは、一年中で一番海が荒れる時期。しかし、こちら夏の大西洋、海は極めて穏やかです。しかも快晴が続いています。そこで星空観測です。前にもお話しましたがこの船には様々なジャンルの専門家が乗船されていて講義をされます。筑波大学の国立天文台から教授がこられて宇宙と星のことを四回に分けて話されました。百八十三億年前にビッグバンがあり、その星空からの光を私たちは今見ているということや、宇宙の彼方はどうなっているのか、私たちの太陽系は銀河系の中のどこにあり、その銀河系は宇宙全体のどこにありどう動いているのかなど、壮大な規模で想像もつきません。私たちは何処からきて何処に行くのか。極めて哲学的でありまた宗教的なテーマです。「なぜ一体、存在者があるのか、そしてむしろ無があるのではないのか? (ハイデガー)」。さてその夜

は船のデッキに上がり実地観測会がありました。都会ではなかなか星空を見上げる機会がありません。ビルの明かりでよく見えないという理由もありますが、それよりも現代人は心の余裕が小さくなってきたからでしょう。南国にすれば定番の南十字星ですがこれは文字通り南に見えるのですが、ここではやや東寄りです。

しかも夜中三時から明け方にかけては見られません。後日、頑張つて早く起きて見ました。低く南の空で煌めく十字は昔の人々が航海で目指した星と同じ輝きでした。日本では見られない星団がここで見られます。マゼラン星雲です。太陽系から十六万光年の彼方にあり、あの大航海時代のマゼランが航海日誌に記録していたことにちなむ名前です。そしてシリウス。太陽を除いて地球から見える最も明るい恒星。日本では冬にしか見られないらしいです。でもここは今真夏です。さらに三連の星オリオン。まだまだ多くの星、星団、宇宙船もみえました。船にあり、地球を旅して夜空を見上げ、はるか彼方をみるのが私たちの昔を見る事になる不思議でした。

大西洋を十日ほどかけて横断し一月七日、船はいよいよ南アメリカ大陸に到達しました。最初の寄港地はブラジル南東部のリオデジャネイロです。ブラジルの首都は内陸に作られた人工都市ブラジリア

アですが、リオはサンパウロに次ぐ第二の都市で昔からつづく港の都市です。南米の国々はほとんどスペインの植民地だったのですが、ここはかつてポルトガル領でした。南米最大の面積を占めていますが、南はアマゾン川から北はイグアスの滝まで、ほとんどが川と森林の国です。

さてリオに入港する朝、デッキにでてみると、多くの白い建物が朝日に赤く染まっており、遠くコルコバードの丘の上に、これも赤く染まったキリスト像が見えました。一九三一年に建てられた有名なリオのシンボルです。映画や写真ではよく見るのですがこうして入港の朝に見るのは感動的です。バスに乗って市内へ出てみるとポルトガル風の美しい建物が沢山建っています。リオと言えばカーニバルとビーチではないでしょうか。残念ながらカーニバルは三月ですのでイパネバビーチに行ってみました。平日にもかかわらず沢山の人がいました。あちらの人は少しの時間が空けば気軽にビーチに行くのだから。他にコパカバーナとか有名なビーチがあります。当然、きれいな娘さんが沢山と期待しますがそうでない年配者もいて少しがっかりしますが情熱的で美しい街です。南米では英語は通じません。ポルトガル語です。また米ドルも使えるところが少ないです。現地通貨がカードです。

もうひとつ、ブラジルと言えば音楽。

サンバはリズムと踊りが中心ですがボサノバは鑑賞のための音楽。ボサノバとはポルトガル語で「新しいうねり」のこと。サンバをもとに一九五〇年代に、昔からの伝統に反発した中産階級の若者達によってジャズとの融合により作られました。有名なアントニオ・カルロス・ジョビンやジョアン・ジルベルトらです。そこで私たちがボサノバ好きグループはイパネバ通りにあるカフェを訪ねました。ここである有名な「イパネバの娘」がつけられたのです。ジョビンとモライスはこの店の席から窓の外、母親のタバコを買いにくる美しい少女を見て曲をつくったとか。当時の店の名前はヴェロゾ。今はガロータ・ヂ・イパネバと言う名前です。そのままですね。とりあえず彼等がいつも座っていたというその席に座り外を眺めました。残念ながらきれいな娘は通りませんでした。さてそれから本場のボサノバを聴きに行きました。しかし現状は当時とは大きく変わっています。ボサノバはもろんブラジルが発生の地ではありませんが現在ほとんど現地では聴かれないとか。もともと中産階級の音楽であったこととJAZZとの融合によってアメリカの音楽になったことが理由です。それこそ日本の方がよりボサノバが聴かれるでしょう。そんな中、この日に演奏してくれた

彼は数少ないミュージシャン。やはり本場で聴く音はすばらしかったです。

夜になり私たちはレストランを探しリオの街を彷徨っていると遠くでけたまわしい叫び声とサイレンの音が聞こえました。何事かと思ひ恐る近づくとか何やらデモらしいのです。ポリスがガードしていたので状況を尋ねてもニヤニヤ笑っているだけ。言葉が通じません。デモをしている若者に聞くと政府に教育改善を要求しているのだとか。ブラジルは急激な経済発展を遂げたおかげで貧富の格差が広がり貧しい人々は十分な教育を受けられないのと、教師の給料が安く先生の質が悪いため授業がまともに行われないとか。しばらく前にもブラジルでは暴動に近いデモがあったのを日本にいて知っていました。私達がいたのはちようどサッカーのワールドカップが開催される前に反対する声があることは知ってましたが、実際に見るまでは信じられませんでした。何故か。それはサッカーが今やエリートスポーツになったからです。ペレやジーコの時代ははるか昔。今は英才教育によって優秀選手を育成します。今回は行けませんでしたが、リオのスラム街は山手にあります。そこで子供達はなるほどサッカーの真似ごとはしているのだそうですが、サッカーボールはあり

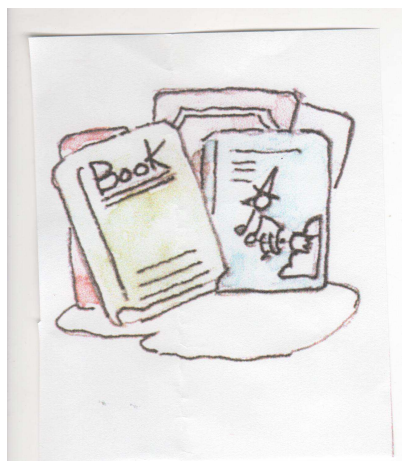
ません。ビールの缶をけているのだそうです。リオの海岸ではビーチバレーをやっていました。どこを見てもサッカーはやっていません。国民の反発はそんな大会に税金を使うのであればもつと国民のために使えということ。オリンピック招致で馬鹿騒ぎをしていたどこかの国と同じですね。昔ならいざ知らず今の時代これをするにどんな意味があるのか。

この時期、熱心にオリンピック誘致に取り組んでいた東京都知事が辞任させられたというニュースは船の中で知りました。辞任の原因はオリンピックではありませんが、誘致運動にプロテストもしなかつた都民や日本国民の感覚はブラジルにも劣りますね。今になってもオリンピックは経済効果神話に踊らされているこの国民は未来を真剣に考えているのでしょうか。特に若者にとってはこの箱物が将来自分たちの大きな負担になるということに気がつかないのでしょうか。このような馬鹿げた運動会如きに大金を使うのであれば、子育て支援の保育所をもつと建てるとか、次の世代のために投資したほうが余程経済効果があるはず。なぜ国民はもつと怒らないのか。

ここブラジルにおいて、話が思わぬ方向に進んでしまいました。南米の人々は明るく、陽気だけれども怒る時には真剣になって怒る。何事にも情熱的な雰囲気

私をこのような気分させてのかもしれない。しかし、この国も今まで巡ってきたアフリカの国々と同様に貧しく、貧富の差が大きいことは変わりません。格差の問題は世界の共通問題になっています。日本もいまのうちに真剣になり対策をとっておかないと深刻な事態になるであろうということはこの旅の半ばで身にしみて体感しました。

さて、南米最初の寄港地ブラジル、リオ。私は一月七日の一日滞在だけで船に戻り、船はアルゼンチンを目指してその夜、出港しました。乗客のなかにはオプショナル・ツアーでイグアスの滝を見るために、長距離バスに乗って陸の経路でアルゼンチンに向かうグループもいます。次の港、ブエノスアイレスで合流するのです。知り合いの人もそのグループで出発しました。しばらくお別れ、つぎの港で会いましょう。アディオス。



『方丈記』より 1

このシリーズは、基本的には題名の通り『今昔物語集』を取り上げていますが、今回と次回は『方丈記』を取り上げることにします。『方丈記』といえば、「ゆく河の流れは絶えずして、しかももとの水にあらず。よどみに浮かぶうたかたは」

云々という、冒頭の名文は有名で、古文の教科書には必ず出てきますが、この短い古典の全文を読まれた方は少ないのではないのでしょうか。この冒頭の文からは無常観を説いた抹茶くさい内容を想像してしまいがちですが、少なくとも『方丈記』

の前半部分は、平安末期の混乱期の京都・平安京の生々しいドキュメントとなつています。この意味で作者の鴨長明は十二世紀の優れたドキュメンタリー記者ということが出来ます。巨大災害が多発する現代の日本に暮らしている私たちにとって、この記録を読むことには大きな意味があると思います。そんなわけで『方丈記』の記事を、紹介することにします。

長明は『方丈記』の前半で五つの災厄を語っていますが、その中の四つは自然災害で、一つは人災（清盛による福原遷都とその失敗）です。これらは一一八〇年から一一八五年の間に立て続けに起こり、長明は二十代の若い時期に体験しているのです。自らが目撃・体験した災害

や政治の大変化、被災した人々と京都・平安京の有り様を、同時代を生きた目から生々しく記録しています。この記述は非常に具体的で科学的でさえあり、またそこに登場する地名は今日の京都の地名とも共通しており、読んでいるとその状況が彷彿としてきます。特に自然災害と被災した人々の描写はその正確さにおいて特筆すべきものです。

私としては『方丈記』の、特にこの部分をカビくさい古典の中に閉じ込めておくのではなく、みなさんにも読んでいただき、約八〇〇年前の京都を襲った天災・人災と、それに巻き込まれた生活者の状況を他人事ではなく受け止めていただきたいと思うのです。

特に飢饉の極限的な状況はまさに地獄絵巻と言つても過言ではありません。死者の数の統計を客観的に記述しようという人間の理性的な営みにも感嘆しますが、その数の語る悲惨さに驚かされます。また大地震の記述は我々にとっても切実なものです。

本文に移る前に長明の時代がどんなものだったのかに目を向けてみます。同じ時代に生きた人としては、平清盛、源頼朝・義経、木曾義仲、藤原俊成・定家、西行、法然上人などがいます。平家の全盛の時代から、源平合戦を通じて、壇ノ浦での平家の滅亡（一一八五年）、源氏の政権・鎌倉幕府の確立へと続きます。こ

の動乱の時代に、自然も歯車を狂わせたのか次々と苛酷な災害をもたらすのです（こう書きましたが、実は気候変動や自然災害がとりわけ多く発生する時代とい

うものがあり、そのような時代には社会が不安定となり、社会的動乱が起こるといふ過程が歴史上で繰り返されているように私は考えています。この時代がまさにその例です。さらに戦国時代の十六世紀後半など。十六世紀には世界史的な規模での社会変動が起こっています。現代の世界もそのような時代に入ってきているのではないかと気がします。ここで取り上げられた災害は以下の通りです。

・大火（一一七七年、長明二十才）
・竜巻（一一八〇年、長明二十六才）
・遷都（一一八〇年、長明二十六才）
・飢饉（一一八一～二年、長明二十七才）
・地震（一一八三年、長明二十九才）

長明は五〇才ごろに隠遁したとされています。それまで歌人として活躍していたのが、以降の隠棲の様子は、『方丈記』の後半に詳しく描かれます。大原から日野（山科方面）に移り、そして長明五十八才（一一二二年）ごろに『方丈記』を完成して、健保四年（一一二六年）六十二才で死去します。このように見ると長明の生きたこのころは、まさに貴族の世の中から武士の世への転換期の激動の時代であったと言えます。このような時代についての貴重な証言をこの『方丈記』は語っているのです。では始めましょう。

なお、教科書に出ない度は、刺激が強いので四／五。

◇「大火」

およそ物心ついてよりこの方、四十年あまりの年月を生きてきたが、その間にこに世界の不思議な出来事を見ること、やや度々になってきた。

さる安元三年（一一七七年）、長明二十三才（四月二十八日だったろうか。風が激しく吹き、騒々しい夜、戌（いぬ）の時（午後七～九時）のころ、都の辰巳（東南）の方向から出火し、戌亥（いぬい、北西）に広がった。ついには朱雀門、大極殿、大学寮、民部の省まで燃え広がって、一晩のうちすべて灰になってしまった。

火元は樋口富小路であったそうだ。病人を寝かせていた仮の家屋から火が出たそうなのだ。強く吹く風に火勢は増し、燃え広がる様子は、扇を広げたように、末になるほど広がっていった。遠い家でも煙にまかれ、近い家ではただ炎を地面に吹き付けるばかりだ。

空は灰が吹き上げられるので、炎の光が照り映え一帯が紅いに染まる。その中を風に吹き切られた炎が一二町を越えて飛び火していく。それに巻き込まれた人々は正気でいられただろうか。あるものは煙りにまかれて倒れ伏し、あるものは炎に包まれてたちまち絶命してしまつた。

身体一つでかろうじて逃れたものは家財を運び出すことはできなかった。貴重

な財宝も塵となつてしまつた。その損害はどれほど莫大だつたらうか。この大火で公卿の十六の館が焼けた。その外の焼けた家は数知れない。すべて都のうち三分の二にもおよんだということだ。男女死んだ者数千、馬牛のたぐいは数知れない。

人がなす営みはみな愚かなものだが、これほど危険な京のなかに家を作ろうと財を費やし、心を悩ますことは、大層愚かしいことなのだ。

《コメント》

この大火は本文のように御所の大半も焼きつくしたもので、歴史的にも有名です。「平家物語」にも記されて「太郎焼亡」という名さえ付けられています。現在の万寿寺通り富小路あたりから出火し、西北方面に扇状に延焼して、大内裏まで達したというのです。これ以後、大極殿は再建されることはなく、御所の場所は現在の位置、里の御所にあたる所に移されたということだ。「燃え広がる様子は、扇を広げたよう」とは的確な表現です。当時は建物ほとんど木材で火に対しては無防備なので、強風のもとではこのように燃え広がると想像されます。現代では東京大空襲や阪神大震災の火災が思いおこされます。

◇「辻風(竜巻)」

また治承四年(一一八〇年)四月二十九日のころ、中の御門京極の辺りから大き

な辻風が起つて、六条辺まで、きつくと吹いたことがあつた。三四町にわたつて吹きまくつたが、その範囲にあつた家などは、大きいものも小さなものも、ことごとく壊れてしまつた。さながらべちやんこになつてしまつたものもある。桁と柱だけが残つたものもある。また門の上が吹き払われて、四五町ほどもさきに飛ばされたものもある。また垣根が吹き飛ばされ、隣と一続きになつてしまつたものもある。

ましてや家の中の財宝はことごとく空に舞い上げられ、桧はだ葺きの板のたぐいは、冬の木の葉が風に吹き乱れるのと同じだ。塵を煙りのように吹きたてるので、なにも見えなくなる。はげしく鳴り響く音に、声はかき消され聞こえない。あの地獄の業風であつたとしても、これほどのものだらうかと思われる。

家が破壊されるばかりでなく、これを修理するあいだに怪我をして身体が不自由になつてしまつたものは数知れない。この風は未申(ひつじさる、南西)の方角へ移動して、多くの人の嘆きをうみ出した。辻風は普通に見られるものだが、こんなひどいのは初めてだ。ただ事ではない。さるべきもの予兆か、などと疑つたものだ。

《コメント》

この辻風は今で言う竜巻と思われる。このころには、異常気象のためか京都の町を頻繁に辻風が襲つたようで、とりわけこの辻風の被害が大きかつたそうです。

これも「平家物語」に記事があります。この辻風は、最近よくニュースで流される「突風」に当たるかと思ひます。この突風は写真や動画で記録されて、はじめて竜巻と認定されることが多いものです。長明の経験した災厄には、自然災害だけでなく人災といえるものもありました。次は、平清盛による福原遷都と、それともなう京都の住民への影響のドタバタを活写しています。

◇「遷都」

また同じ年(一一八〇年)の六月のころ、にわかに遷都が行われた。これはいそが意外なことであつた。そもそもこの都の始まりを聞くと、嵯峨天皇の御代に都と定められて以来、既に数百年を経過している。さしたる理由なく安易に変えるべきものではないので、これを世間の人々が難儀なこつちやと嘆きあつているのも当然すぎるほどだ。

しかしとやかく言つてもしかたなく、帝をはじめとして大臣・公卿はことごとく摂津の国浪速の京(福原京、現在の神戸)にお移りになつた。公に仕える人は誰一人として京に残る者はいない。自分の地位を守ることに懸命で、主君の覚えを頼りにする人は一日でも早く移るうと汲々とした。タイミングを失いあふれてしまつた者は、嘆きながら京にとどまつた。

かつては軒を競つた家々は、日がたつにつれて荒れていく。家は壊されて淀川

に浮かび、見る間に土地は畑にされていく。人の心はすっかり変わつてしまつて、馬に乗るためにただ鞍を重宝し、牛車を必要とする貴人はいなくなつた。だれもかれも西南海の方面の領地を望み、東北方面の莊園は嫌がる。このころたまたま機会があり、津の国の新都に参つた。その地勢を見ると、土地は狭く条理制とするには足りない。北は山に向かつて高くなり、南は海に面して低くなつていく。波の音はいつもうるさく、潮風はとりわけはげしい。内裏は山の中なので、あの木の丸殿もこんな様子だったのでと思わせるばかりで、なかなか珍しい光景で風情を感じる点もある。

日々に壊れて川面も混雑するくらい運び下る家はどこに作るのだらうか。さらに空き地は多くなり、作る家は少ない。旧都は既に荒れて新都はいまだ形をなさない。

あらゆる人がみな覚束ない不安を感じていた。もともとこの土地に住んでいた人々は土地を奪われ憂い嘆き、新たに移り住んだ人々は建設の苦勞を嘆く。往來をみると車に乗るべき人々が馬に乗り、衣冠の盛装を着用すべき人々は普段のひたたれを着ている。都風の洗練されたファッションはみるまにうらぶれ、ただ田舎びた武士の風情にほかならない。

これは世の中が乱れる兆しだと言ふもおろか、時が移るにしたがつて、世間は落ち着かず、人心も治まらない。民衆の不満がいや増してきたので、同じ年の冬にまた京に帰つてこられた。しかしなが

ら壊してしまった家などはどうなっただろうか。隅々まで元のように復元したわけではない。

かすかに伝え聞くに、昔の賢帝の時代には慈悲の心をもって国を統治された。つまり宮廷に茅を葺いて、軒さえ整えなかった。都に煙りの上がり方が少ないとご覧になる時には、みつぎものが足りないのさえお許しになった。これは民が潤い世の中を救済されるためであった。今の世のありさま、昔と比較し知るべきである。

《コメント》

この項は、他の四つの災厄が天災であるのに対して、純粹に人災といえます。云うまでもなく平清盛による福原遷都とその失敗の模様を、当時の生活者の視点から描いています。各階層の欲と利害のからまった人間模様がよく出ています。



素老人☆よもだ帳 11

坂本一光

◆季節みな美しい国の教育は美しいか

政治は人がするから、季節みな美しい国の政治が美しいとは限りません。それは教育も同じです。何が美しいかは人により違ふでしょうが、何が醜いかに人によらず共通するものが多いような気がします。振り返って醜いと私が感じた教育の話を書きます。

よもだ帳(第九話)に、小学校五年生の時に『原子力明るい未来のエネルギー』という標語を考えた福島少年が二〇一年三月十一日の福島第一原子力発電所の事故に遭遇し、町に架かる自らの標語をおよそ二十五ぶりに『原子力「破壊」未来のエネルギー』と訂正するテレビ番組のことを紹介しました。「大人が仕掛けた罠に少年はいとも簡単に落ちる」と書き、番組を見ながら中学二年生の一九六二年に実施された全国一斉学力テスト(以下『学テ』と略)の時の体験を思い出したことを記しました。

学テの体験を思い出したのはそれが最初ではありません。学テ当時は何が起ったのか、何が問題なのか、考えることもできず立ち尽くすことしかできなかった私は、いつしかそんなことも忘れ大学に進学していました。それまで自分の内側の世界しか見なかった私は、自分の外側に広大な世界があることを知り、多少は世の中の仕組み、すなわちからくりが

見えるようになっていました。大学をいかに管理するかが国の教育行政上はつきりと課題になりはじめた頃です。すでに一九六六年には中央教育審議会が『期待される人間像』を答申していました。法律で大学を管理する国の方針はこのころ形をはっきりと見せ始め、およそ半世紀を経た二〇一五年の国立大学法人化によってほぼ完成します。私は、大学管理が国の意識に明確に上がった頃に大学生になり、その仕組みが完成した直後に大学を辞めたことになりました。学生の抵抗はその半世紀の間にはほぼ完全に止んでいました。大学教職員の抵抗力は、大学の法人化を社会問題とするほどの組織力に欠けていました。あらゆる分野で社会の組織的抵抗力が削がれて行った半世紀であったということでした。

もとに戻ります。自分は大学で何をどう学ぼうとしているのか、大学を取り巻く社会状況の中で考えようとして、ふと、忘却の彼方にあつた中学二年の時の学テの体験を思い出したのです。これが最初の学テ思い出です。その時の私の確信は、どんな美辞麗句や熱い善意に包まれていても、権力が教育に介入すると教職員も学生・生徒・児童も、教育にかかわるあらゆる個人が醜い教育に巻き込まれるということでした。それを止めるためなら、どんなに小さな力であってもその力を尽くしたいと思いました。ささやかな決意は、二十六年間の大学教員という私の唯一の社会人生活(定職を持つ生活というだけの意味)を支えたと今でも思

っています。

二回目の思い出は、何度も言うとお原発標語訂正番組を見たときです。この時は、子どもを罠に落とす、そう言うて悪ければある方向に導くのは、善意からであれ悪意を持つてならなおさら(あるいは逆に、悪意からであれ善意を持つてならなおさら)、いとも簡単なことだということでした。後で言うように、余程のことがあつても、何が問題なのか、何をどうしたよいか、子どもにはおいそれと気がつかないことが多いのです。子どもに限らないかもしれませんが。

そのあとの思い出は、昨年二回ありました。一回目は、ある県で県統一の学力テストを実施したとき、ある学校である教師が本番テストの前に、すでに学校に届いていたテストの内容をある方法でつかんで子どもに事前学習させたというニュースを見たときでした。全国学テは学年を特定して最近復活しており、政権交代後に一時実施学校を抽出していたのが再びの政権交代で特定学年ではあつても全学校実施になっていきます。結果を公表する、しないが議論になっていたのも記憶に新しいところです。そういう状況下では、全国平均より学力が低いと言われた県では、県学テの実施を含めて対策がまじめに論じられ実施されます。そういう勢いの中では、同一問題の事前学習などは、私に言わせれば当然起こりうることです。何故なら、教員の組織的抵抗力がまだまだ残っていた一九六二年においてさえ私の前で起こったことの一つで

緊急特集 問題の本質は何か

去年の暮に骨折して一ヶ月ばかりの入院生活をし、今だに自宅リハビリ中のリタイア哲学屋であります。自分の身体のことよりもやはり気になるのはイスラム教に関連しての国際情勢です。一つは、フランスでの風刺週刊誌のイスラム預言者に関する表現に端を発しての騒動。それからイスラム国による日本人質問題。それぞれの事件における状況や原因は異なっていますが、両者に共通な気になることがあります。

再三述べていますように、単なる元哲学屋が時事を語ることは憚れるのですが、なるべく専門の哲学から見ての見解として紹介したいと思えます。

まず思うのは昨今の世界時事に関係しているのがイスラム教という、まあ、我々アジア人から見れば特殊な宗教で正直よくわからないなという感想です。誰でも背景がよくわからない人々が起こす事件については不安に思うし、また敵対心を抱くものです。これは他の凶悪事件と同じ心理ですね。宗教の起源とその役割については、このコラムでも哲学との関連で以前に述べました。今回のフランスでの事件では、宗教的な問題ではなく表現の自由が全面に出てきました。この事件の少し前に、米国で起こった北朝鮮指導者を題材にした風刺映画公開による一連

の事件も同じですが、その背景には『自由、平等、博愛』というフランス革命以来の西欧社会がもつ共通の理念があるようです。この理念は民主主義という思想にとつて基本となっています。しかし、一方、これはある意味で非常に宗教的な理念でもあります。

フランスはローマ帝国滅亡後正統的にカソリック教を引き継いだ西ヨーロッパの代表国です。その後、ドイツから起こる宗教改革、イギリスにおける清教徒革命などキリスト教国の間でも長期の内戦を経て、またイスラム諸国からの侵略なども経験して、キリスト教信仰そのものも大きく変化しています。日本では、国民が宗教離れして久しいと感じられています。クリスマスやハロウィンでは騒ぐし、正月は神社へ初詣、葬式はお寺さんでとんでもないようですが、もともと日本人は多神教信仰の国。平安時代以後、仏教と神道は融合しており、むしろ明治政府によつて強制的に分離させられた近代の方が不自然なわけです。

現在のヨーロッパでも宗教離れは進んでいます。イギリスやフランス人に聞いても滅多に教会にはいかないという人が多いそうです。彼らには宗教に関しての選択肢は多くありません。キリスト教でなければ、後は無神論者になるだけです。なぜなら、一神教として長い間その文化におれば、多神教は異端に感じられるからなのでしょう。それなら無神論者の方がマシというところです。少なくともまだ決定してないという猶予が持てます。信

者以外は救われないという一神教の呪縛が徹底しているのでしょう。

キリスト教に取って代わって彼らの宗教というものになっているのが西欧型民主主義であると思われまます。民主主義は制度でありますが、思想でもあります。その背景がフランス革命の思想です。これは新しい宗教といつても良いでしょう。そのひとつの理由は、この『自由、平等、博愛』の保証が、同じ思想に基づいての限りという条件があるからです。一神教独特の排他的な考え方です。今回のフランスでの事件では想像を越えた国々の連帯表明がありました。共通なのは自分の国は表現の自由を守る民主主義国家だと言いたいのでしょう。しかし、それらの国々の思惑は同じではありません。まず台頭してくるのはナシヨナリズム。次には民主主義を利用しての全体主義です。

現在の民主主義は皆が考えるほどの普遍性は持っていないと思います。その証拠に、戦争を起こし、拡大するのは決まって民主主義国家です。日本でも先の選挙での投票率に見られるように巧妙な戦略により、一部の利益享受層が民主主義を利用して国を支配しようとしているということも十分考えられます。過去、ドイツでナチスが生まれたのは当時では先進的な民主主義制度の下であったことをもう一度思い起こす必要があります。

さて、そのような不安定な欧米型の民主主義が支配している現在の世界情勢にあり、今回のイスラムに関する事件を含



すから。こういう歴史は闇に閉ざされるし、半世紀後にその歴史に学ぶなどということは今時（今時というのは、先ほど述べた組織的抵抗力があらゆる社会分野で巧妙に削がれた今時、という意味です）至難の業なのでしょう。『一度は悲劇として、二度目は茶番として』とはよく言ったものです。『よもだ帳（第九話）』のマルクスの文獻。二回目は、これは別の県のある市の教育委員会が学習塾を開くというニュースでした。どういう体制で学習塾を開くかはよく分かりませんが、この市には学習塾がなくそのために学テの結果が悪いというものでした。まじめな議論を嗜うつもりはありませんが、涙は出ます。

半世紀前と比べて教育は美しくなっているのか、醜くなっているのか。教育は人類の永遠の課題です。人間の愚かさの証明であるかのように。私の学テ体験は次回に続きます。

（かたちは心であり、心はかたちになる ■ 大分の素老人）

め根本的な問題のベースの多くは欧米の戦後処理体制にあると思われる。改めて現在の国際情勢の大きな問題をあげてみると、中東パレスチナ問題とイスラム教国、アフリカ内戦。アジアでは北朝鮮問題と日本戦後処理問題。よく考えて見ればすべて第一次、第二次世界大戦後の処理に関するものばかりです。現在では赤ら様な植民地支配や侵略戦争こそありませんが、今まさに過去の二代大戦を勝ち抜いた国が定めたルールが存在していませんが、だんだんとその矛盾が出てきはじめています。しかし、これらの矛盾に関しては、これにコメントすることの難しさがありません。本来の民主主義は少数に意見について尊重しなければならぬはずですが、そうはなっていないところに一層の問題を残します。

現在の国際情勢にコメントする時の立場には大きく分けると二つの大前提があります。それはこの戦後の体制を認めるのか、そうでないのかということです。わかりやすい例でいうと、日本での戦後処理問題です。極端に言えば、戦後処理を認めない、すなわち極東軍事裁判は無効という立場です。日本は止むを得ず戦争をした侵略戦争ではなく防衛戦争、アジア解放戦争だと考えます。それではこの考えをイスラムに当てはめてみましょう。イスラム国が言うようにイギリス、フランスが勝手に引いた国境線は無効だ、我々はもとここにいた。また、パレスチナ問題も同様です。そもそもイスラエルと言う国を勝手に作ったのは誰

かと言うことです。日本の政治家の中にも極端な右寄りという人の考えには、靖国参拜問題、憲法問題等という戦後体制に疑問を持っていると思われま。しかしそのような人々は中東やイスラム問題に関しては、不思議なことに戦後の体制を頑固に認めています。ダブルスタンダードであると私には思われます。

さて、このように現状の国際問題は大きく世界歴史的に見てやはり戦後処理の問題であると考えざるを得ません。ではなぜこのような危機的な状態になるまで何もなかったのかということも問題になります。もともとこの戦後処理は矛盾をはらんでおりすぐに表面化したはずです。なぜなら、戦争という一方的な暴力でもって問題に決着をつけたため、何ら根本的問題が解決されていないからです。この戦後処理問題の表面化が遅れたのは、一般に言われるようにいわゆる東西冷戦状態が一定の忘却装置として働いたからでしょう。

第一次大戦は植民地をめぐる欧州の国々での戦い、この再配分によって現在の中東、アフリカなど現在の紛争の火種が作られました。第二次大戦は、第一次大戦の敗戦国が中心になり全体主義という国家体制で失地挽回をはかったという戦争でした。両戦争とも本当は欧米による植民地獲得戦争であったのですが、そんな大義は認められませんが、勝戦国は民主主義という大義を作ることにしたのです。戦後は資本主義対共産主義の戦いに移行しました。冷戦とはいっていま

すが、ベトナム戦争や中南米での内乱で多くの血が流されておりこの表現は適切ではないと思えます。しかし、この場合でも資本主義側の大義は民主主義のままです。おかしなことに共産主義に民主主義はないかのように認識されていました。先ほども言ったように民主主義は思想ではなくて制度です。民主主義ではなく民主制ですね。逆に資本主義に民主制がないものもあるのかという、これは王政の国、選挙権が制限されている国等々たくさんある国があります。

ところで、第二次世界大戦後におこったこの冷戦は資本主義と共産主義の対立です。この共産主義というのはあくまでも経済制度なので民主主義制度と相容れないということはありません。当時はプロレタリア独裁という独裁主義が主流だったので資本主義側から民主主義という大義を立てたのです。しかし仮に議会制民主制の共産主義だったらどうでしょう。そもそも、共産主義というのは所有権の問題であるはず。すなわち個人の所有権を制限し資本の共有を国家によって行う経済制度です。ソビエト連邦の崩壊以後、共産主義国家が崩壊したことにより、この制度が消滅したように思われていますが、共産主義が単なる国家による経済制度とすれば現在も北欧で行われている高福祉国家のような社会民主主義もその一形態であります。過去、マルクス主義のなかでも共産主義対社会民主主義という議論が広く行われ、本流とされるソビエト型国家からは改良主義と批判せ

れていました。この本意は、やはり経済制度というよりプロレタリア独裁という国家管理、支配制度の問題にあるのでしよう。やはりここでも対民主主義という問題が浮上します。

現在主流の民主主義の付属概念あるのは、自由主義です。この自由主義というのは個人の所有権を基本において、その権利の拡大を自由に認めるという主義です。つまり、強い者が限りなくその力を発揮しても構わないという主義であり、その限りにおいて民主主義が保証される制度です。

かつてキリスト教という宗教によってタガがはめられていた西欧は、所有権という自由主義を背景に本来所有という概念のない地域を植民地支配し、その力を宗教以上に信仰しはじめついに元来のキリスト教自体も放棄してしまい、いわば自由主義という宗教の信者になったのです。そしてそのセットとしての民主主義はグローバルのシンボルとして世界共通の価値観になりました。キリスト教というのとはもとヘブライ民族の宗教であり、彼らヨーロッパ民族の宗教ではありません。フランス革命により彼らが自分たちの文明の故郷というギリシャの民主制度を民主主義という新たな宗教にしてはじめて自分たちの共通の理念、宗教をもたえようと思われま。しかし、この西欧型民主主義にヒビが入りはじめているのが、最近のイスラム世界からの問題提起ではないでしょうか。問題は決して単純な『テロとの戦い』ではありません。

折りしも来日中のベストセラー経済学書「21世紀の資本」の著書トマ・ピケティ教授は「自由と平等。民主主義の理念のうち、自由がグローバル時代の空気となる一方、平等はしばらく影を潜めていた。だがその間、貧富の差や社会の亀裂は拡大し、人々の不安が高まった。」と言、「民主主義は闘争。誰もが関わらなければならぬ」と日本の若者にメッセージを送っている。

ほんの寄り道として書くつもりとした時局の本質分析が深く入り過ぎてしまい、若干、本業の哲学と離れてしまいました申し訳ありません。しかし、哲学テーマとしては『幸福とは』『国家』『所有』『自由』といった重要なことがらも含まれています。前回までの哲学テーマ、認識論の問題、経験論対合理・理性論の対立を乗り越えるカント哲学の『コペルニクス的転回』は次回に持ち越しになります。



花盗人のうらおもて 1

大江健児

景観の保全を訴えるケースだったり、ウン十年スパンでのヒット曲を取りあげ

るテレビ特番だったりと内容もさまざまなのだが「守っていきたく」とか「未来へ伝えたい」とかいったフレーズがある。これらのフレーズを並べると、そこに発想の類型とでも呼べるものが浮かび上がってきそう。発想の類型というとかッコ付けすぎだろうか、簡単に言えば二番煎じの見本市が出来上がる、という点である。二番煎じという点で大きなマイナスがいきなり付いているわけだが、押しつけがましさがある上に加わるので、まったくもって好感の持てないフレーズである。もし「未来に残したいフレーズ」の選考委員を任せられたら、まずこの手のものを除外するところから始めたいくらいだ。景観であれ歌であれ言葉であれ、それが個人の嗜好に同調するものなら大切にしたい。普通は普通は、私だが、それであればダイレクトに「私は××が好きだ」というだけで事足りよう。それをわざわざ願望の共有を強いるあたりに嫌みを感じるのである。さて愚にも付かない話は置いておき、今回の話題「花盗人（はなぬすびと）」は、個人的には少なからずのこだわりを感じている言葉である。この言葉を未来に伝えたい

と思う人がいるのかいないのか、あるいはどこかの誰かが守っていきたくかどうか、そういった他人様の事情は存じ上げないが、いろいろな形で使われているのは確かである。

まず身も蓋もないパターン、文字通り「花を盗む者」としての用法から。「花盗人お断り」や「花盗人は犯罪です」とかいった具合で花壇や垣根の近くで見かける貼り紙がそれである。「花泥棒」と言わず「花盗人」とするとところに一片の風情はあるが、基本的には字義そのままの深みはない。もちろんこれが本来の使い方であり、古い用例の一つである枕草子でもその解釈が当てはまる。これに対して、少し捻りが加わった用法として挙げられるのが敦道親王と藤原公任の間で交わされた贈答歌だろう。敦道親王が恋人の和泉式部を伴って公任が別荘の白河院を訪れた折のことである。あいにく公任は不在だったが屋敷は自由に使って構わないとの言伝が残されていた。それで敦道親王と和泉式部は白河院での花見を楽しんだのだが、帰り際に親王が家守に託した歌と、後日、公任から送られてきた返歌、

われが名は花盗人と立たば立て

唯だ一枝は折りて帰らん

（私を花盗人とはやし立てるのならそれでも構わない。今日はこの美しい一枝を折らして帰りますから）

山里の主に知られて折る人は

花をも名をも惜しまざりけり

（主の断りなく枝を折る人は、桜の花ばかりか、自身の評判も惜しいとは思わないだろう）

この応酬は直截的には桜の枝を折って持ち帰ったことを話題にするものになっている。しかし言葉の裏にほめかされているのは和泉式部の存在である。和泉式部はこの時点では敦道親王と恋仲にあるのだが、少し前までは兄の為尊親王からの思われ人だった。それが為尊親王の急逝によって組み合わせが変わり、口さがない世人による噂の種となっていたのである。こうした背景を理解しておけば敦道親王歌にある「花盗人」に桜の枝を折る者という以上の意味を嗅ぎつけることはできるし、公任歌にある「名」への言及も意図するところが見えてくる。現代でも「花盗人」という言葉にはセクシヤルなニュアンスが伴う場合もある。そうしたケースには、言うところの「花」に美しい女性のイメージを重ねる発想がみてとれる。

こうした微妙な翳りをもつ「花盗人」を格段にポピュラーな日常語に仕立て上げたのは、近世から明治期まで続いた謡い物ブームである。能楽だけでなく狂言の台本も数多く出版され、舞台を見て楽しむのに加え、文字を読んで楽しむ享受スタイルも生まれた。もともとと狂言の演目だった「花盗人」が日常の言葉に溶け

込んでいったのも、そんな流れがあつてのことである。ただし狂言絡みで花盗人を考える場合、少し注意が必要になる。

引き継ぎ

というのは、現代ふつうに使われている辞書では花泥棒という意味を記すとともに狂言「花盗人」を挙げて、そのあらずじを紹介するのだが、ざっと読むとその二つを重ねて考えてしまうからである。

狂言のあらずじは大同小異、桜の枝を折ろうとして捕らえられた男が和歌を詠むことで罪を許される云々といったところか。これを「花泥棒」の上へ流し込むとどうなるだろう。「行為は窃盗だが心は風流を解する善人」とかの好意的な解釈が生まれてくるのではないだろうか。貼り紙で「花盗人は犯罪です」と断り書きをするのもそんな解釈の芽を摘もうとしてのことのように感じられる。自明の論理で定義できる犯罪は「は犯罪です」と断つたりしない。どこかに、美を知ることがゆえの行為だから許してもらえない？とかいった錯覚があるのだとすれば、それは狂言「花盗人」がもたらしたものののではないだろうか。

ところで、実際に狂言「花盗人」と付き合わせると、どうだろう。本当にこうしたご都合主義的な解釈が生まれる素地はあるのだろうか。話が長くなってきたので、続きは次回ということ。(続)

引き継ぎ

Tさんとの中国関係の引継ぎで、明石はTさんが喋ったことのポイントを大学ノートに二く三行メモしただけだった。

何か物足りず、肝心なことが抜けているように感じたので、「最後に、もう一つ質問があるんですが」と断わりを入れるとTさんは、八重歯を見せながらニコニコ笑い「何でも聞いてや!」と、明石がどんな頓珍漢な質問しても良いよ、と何でも言えるような雰囲気を作ってくれた。

「ところで、我が社の中国市場での強みは何ですか?製品の価格、品質、サービス力ですか?それともTさんを始めた、輸出部の営業力ですか?」と質問した。それに対してTさんは、真面目に「エエ質問や。俺はそれを言うのを抜かっていたなあ。段ボールのどこかに俺が書いている中国市場への取り組みというレポートがある。そこに君が質問した答えが、俺なりに私見として書いてあるので又、見てくれるか?」と言われたので、それなら、それを机の上にも於いて、これをよく読んでおいてと言ってくれたら、良いのにと、内心では思ったが、それを顔に出さずにTさんの次の言葉を待った。

「ウチの強みは、中国東北地区の寒冷地に米作りの機械を使った営農技術を導

入し、その技術を教えることで、旧満州の東北地区の寒冷地での米の安定増収に繋げて、実績を上げつつあることや。それはなあ、機械を売るだけではなく、苗づくりから、中国の農民に教え、その上で、ウチの田植機を使い適期に早く、効率的に田植えをすることで、農民の田植えの過酷な労働、特に女性が中心で田植えをしているが、その重労働から解放されるのと、霜が降りるまでの時期に出穂

すること、冷害を避けることが出来ることや。その結果、安定増収に繋げることが出来るのや。それは、日本の東北、北海道の寒冷地で先人が苦勞して米の安定増収を実現してきた営農技術と、日本が誇れる稲作機械化のノウハウを中国の広大な北の大圃場に持ち込み、ウチのサービス員が自ら田んぼに入り、手取り足取り、中国人に教えて実践していることや。機械を使った米作りの技術がウチの強みやなあ。これは、現地に行つて実際見ないと分からへんわなあ。ウチが派遣した技術サービス員はようやつていて。特にOさんは、東北農業試験所出身で、地元宮城県で培つてきた寒冷地の米作りの技術を中国人に教えて、米作りの先生と尊敬されて、中国で高く評価されているんやで。こうした人を抱えているのがウチの強みやなあ。明石君も来年五月の田植えシーズンに行つて見て来いよ。なあ、Mちゃん、明石君を中国に行かしてやつてなあ。」とTさんの話は終わった。

明石はこの話を聞いて、自分の会社がこんな活動をしているのかと、多いに心を動かされた。中国大陸で自社の機械が活躍して、サービス員が中国農民と米作りを通じて、友好的な技術交流を行っているかを直に見るだけで、担当としての中国市場をどう展開するか絵が描けるのではと思った。

しかし、Mさんは、Tさんの言ったことに対し、異を唱えるように「Tちゃん、アンタが言つてること、現在やつてることとは、立派なことだと思つて、会社として、採算的には全然合わんのと違つか?サービス員を一か月以上も5人も6人も送り込んで、その経費だけでも相当かかるやないか。況して、本機が採算すれすれで、関連商品で粗利を稼いでいると言つても、トータルとしてはマイナスと違つか?Tちゃん、技術交流とか、日中友好だとか言つて技術サービス員が苗づくりから指導して、機械の修理技術を教え、技術移転をやつてはいるが、中国側は商談の時には、それを評価せず、他社と天秤にかけられ値段を叩かれる。余りにも中国側の要求ペースに巻き込まれて、ビジネスという観点から外れていくような動きとなつてはいるのと違つか?A課長は元商社マンやから、売つてなんぼ。実績積んでなんぼ、と言う考えやで、工場の立場、採算なんか余り考えずに、他社に負けられへんので、値段を下げてでも最後は取りに行こう。これだけで判断して

いるのと違うの？果たしてこの先、どこまで、これが続けられるのや？TちゃんもU工場を説得するのに苦労したやろ。

まあ、これから機械の買い付け台数が年々増えて行き、採算が向上すれば、別だけど、いずれ近い将来、ウチの機械を模造したコピーが中国で出て来るし、国産化に協力せよと国の方針が出るかも知れんぜ。Tちゃんがここ二年で苦労したことをそのまま、俺らが引き継いでやっても、報われへんのと違うか、さつき言ったわなあ。そうであれば、俺らは、今のやり方を変えるか、又は、続けて行くのであれば、どこで、モチベーションを保ち続けられるのや？」と、Mさんは持論をぶつけた。

Tさんはそれに対して冷静に「Mちゃん、弊社は業界トップの立場として、中国政府から要請のあった中国農業の近代化に協力するという方針を、M副社長とS専務が決めたんや。それで、中国農産部、工業部との交流がスタートした。当然、一企業が協力出来る範囲は限界があるんやが、やるからには、多少の採算は度外視しても、中国側からの協力要請があった寒冷地稲作の機械化というテーマに応えようと言うことで始まったんや。外貨の乏しい国なので、工業の近代化を優先して外貨を回してしまい、農業の近代化ということには、農業従事者も多く、国土も広いために、なかなか外貨を使って外国から機械、技術を買おうと言う動

きになっていない。農民が近代化の恩恵を受けるのは、何十年後かも知れんなあ。

そう買い付け台数が大きくこれから増えることは、期待できないが、我々はトップの方針により、それに従って動いている。ただ動くだけでは面白くない。それで、現地に行つて貰う技術サービス員には、ウチの機械を使つて中国農業の近代化と日中友好に貢献しているのや、儲かつてなくとも大事な事をやっている、自分らは井戸を掘る人になろう、とか言つてモチベーションを上げているんや。当然、俺自身もそう納得させ、やっていたんやが。長い目で見て、種を蒔いてるので、Mちゃん、明石君があと何年やるか分からないが、色々な種を蒔いて、後に繋いだらエエのと違うか？まあ、欧米の市場と違い、地味な仕事やで。こんな仕事も会社として社会貢献、民間外交の見地でやらかなアカンのと違うか？中国を担当していたら、今の評価基準であれば、表彰されることはないけどなあ。それでも、俺はやる価値はあると思うので、明石君、君が頑張つてやってくれよ。君は工場経験もあるし、資材部にもいたから、U工場とか、関連商品の交渉も上手くやれそうや！」とMさんの問いかけに、上手く交わして、明石を最後に持ち上げてくれた。Mさんは、それに何も反論はしなかったが、納得はしていなかった。

埋め草

「埋め草」とは、新聞や雑誌の余白を埋める短い記事のこと。今回、編集の都合からそんな埋め草が必要になったので、思いついたことを思いついたままに並べてみる。

今日では二月三日に固定されている節分。最近の風潮でいえば、恵方巻の丸かぶり話が話題に挙がるが、これはどうやらビジネス戦略的な色合いが濃いようだ。諸説あるとのことだが、元々は船場の旦那衆らが始めた遊びだったとか。そんな遠い昔の遊びをことさらに掘り起こして、いわくありげな風習であるように喧伝する、その裏にあるのは、当然ながら寿司業界の目論みということだろう。近年のケースではコンビニ業界が積極的に旗を振っている感があるが、根っこは変わらない。

そうした「つくられた風習」たる裏話を小耳に挟むと、同時に頭を去来するのはバレンタインデーである。思えば二月十四日に女性が男性にチョコレートを贈る風習だつて業界の目論みから生まれたものだろうし、古くは七月末の土用の丑にウナギを食べるというのも平賀源内が仕掛けたうなぎ屋のための販促戦略だったらしい。とにもかくにも人は昔から似たようなことをしているのである。

ところで、土用の丑といえは七月末に固定して考えがちなのだが、正確には春

夏秋冬、季節の変わり目に土用はやってくる。七月末の土用は夏から秋へ移り変わる期間であり、その間に訪れる丑の日が、いわゆる「土用の丑」である。

そして、同じように節分というのも、春夏秋冬それぞれの始まる日の前日になるわけだから、厳密にいえば一年に四度めぐってくる計算になる。春の始まり、すなわち立春の前日が暦の上でいう一年の始まりなので重視されているまでのことである。

実際の話、現代人は旧暦にしたがつて社会生活を営んでいるわけではない。節分といつても神社でのイベントが何やら盛り上がつていそうだから(テレビの情報番組がとやかく騒いでいるみたいだから)気に掛けるまでであつて、大晦日や元旦のような重みは感じない。そこに加えて、実は節分は一年に四回あるんですよとなると、その昔、某テレビ番組でやっていた「水戸黄門は七人いた！」というネタを聞かされてみたいで微笑ましくもなる。(C)



かきくけく

私が実践していることは「かきくけく」です。

「か」は日記に、メモに自分の思いを書く。

「き」は人の話をよく聞く、そして気分を変えてゆく。

「く」は工夫。大事な仕事、用事がある前日は早目に休む。生活の中で体に合わせて工夫すること。

「け」は健康。日々の体調管理。自分の事は自分にしかわからないから、心を落ち着かせ、理想の男の人の夢を見ることもボケ防止につながると思うのですが、如何ですか。

孫娘に、この意味を話したら

「おばあちゃん、まだ若い気持ちやなア、元気でいいよ。百歳まで生きられるで、アハハハ…」

私も、うれしくなり、その後も心が浮き浮きしていました。

心からのほめ言葉は、人を励ますよい薬ですよ。皆さん！



ありがとう

安ベエーも、今日はいやにおとなしい。

やっと原稿を書く気になった。自分が落ち着いたからだろうか。

「衣食足りて礼節を知る」むずかしい格言を思い出した。今の自分には、まだ満ち足りていないのか。心安い仲間同志の茶話会に出席し、或るものを提供したのです。

参加者は、ワイワイと、雑談に没頭するのみで、自然にそこにあるもののようにして、口にしては、お茶を飲み、大人気ですぐになくなったけれど、出席者からは「ありがとう」の一言が全くなかったこと。物を頂いた時にはお礼が言えるはずの大人ばかり。

物が豊かになつて感謝の心を忘れたのでしょうか。そういう我が身を振り返った時、「ありがとう」を言うべき時、言わなかったと反省しながらも、「最低二回は言うとうい」

知人からの諫めの言葉を忘れないようにしたい。

哀しい話

老化現象の現れとして、まず人の名前が憶えられなくなり、顔まで憶えられない時がある。

誰かが呼んでいるな、と振り返ったら。

「ああ、しんど。わからへんの、聞こえへんの」と散々顔を見てぼやくのやけど。「あんた、誰」「よういわんわ」一緒に公民館で勉強したやないの。民族学の：寺社見学まで：」

「やつと、しばらくやネ。元気だった」自然にごまかしたけれど、今でも名前が思い出せないまま。誰だったかなア。

いくら考えてもわからない。

「あの人、どうして居られますか。」

「元気ですよ」とたつた一言返答したら、次から次へと出てくる。自転車のハンドルにぎつたまま、私には全く覚えがないのだ。

それぞれ、ある時の、へえ、行った覚えがないのだから、私も気分屋だから、気分が悪くなれば、絶対に参加しないのだから。

雲行きが悪くなり、足がガタガタ震えてくるのだ。

「ゴメンネ、そんな会合には、私は出席していないのだけれど。」

「ああ、失礼。人違いでした」サーツと自転車でスイスイと。

ええ加減にしてよ。こっちのアタマがボケてるのに、あんた、しっかりしてヨ。

俳句

土田裕

何食べて色あざやかな寒鳥
籠り居に暮れる一日やぼたん雪
藁を着て風雪に耐え牡丹の芽
忽ちに中洲の失せて雪解川
春めくや妻の手に成る鉢植えも

編集後記

「人生は挑戦である」と言いながら歩き続けられていた戸田巽さんを、最近お見かけしないのだが、八十八歳の時に大阪の天保山から富士山山頂まで歩いて登り、ヒルトンホテルで皆さんを招き祝賀会をされた。私も参加させて頂き感激したことを思い出します。

私も、病氣してから歩くことに関心が出てきて、毎日歩いていきますと、戸田さんが、毎日のように三〇キロから四〇キロを歩き続けておられた気持ちに少しは分かるようになりました。

六甲山を縦走しながら、汗をかき、そよ風に吹かれると迷いが消え爽快感が湧き出てきます。ああ、生きているんだなあ。と実感します。

「生きる事は、歩くこと。」だと知らされます。

文句なしに私は、戸田さんを尊敬します。(嘉)